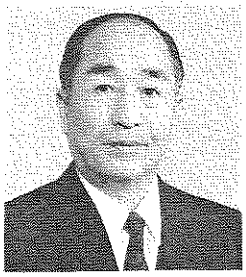
栃木県中学校長会会報



望まれる校長の自覚と行動

栃木県中学校長会副会長
宇都宮市立旭中学校長
清　水　　昭

私は、昨年度から全日中の給与対策部副部長を命ぜられています。毎月本部の会合に出席し、全日中としての「教職員の職責に見合う待遇の改善」を図るための活動を展開してきました。その内容については、会員の皆様も全日中の会報や資料等でご案内のことと存じます。

今年は特に、①校長・教頭の管理職手当を引き上げる（校長16％へ）とともに期末・勤勉手当の算定基礎に繰り入れること、②教職員特殊業務手当（部活動指導業務）を増額することの二点を最重点として、文部省・大蔵省・自治省・人事院・関係国会議員等への要望活動を何回も展開してきました。幸い文部省当局は趣旨をご理解くださり全日中と一体となって大蔵省へ予算を要求してくださいました。しかし、残念ながら人事院や大蔵省の壁は厚く実現までにはいたっておりません。

待遇改善の要望活動を展開する中で、私自身の反省を含めて強く感じますことは、まず校長自身が教職員の待遇について関心を深め、基本的な勉強をしっかりやって意識を高めていくことが強く望まれることです。次に、実際に要望活動を展開してみますと、校長の職務の重要性とか、教職員の待遇の実態とかが相手方によく理解されていないことがあるという問題があります。何回も要望活動を展開する中で、部活動業務手当の６２０円（土・日）というのは、１時間当たりの手当ではなく、半日とか１日の手当であるということが納得されるという現状もあるのです。

県校長会とか、全日中という組織を挙げた要望活動も大切ですが、今後は、会員一人一人が自覚を深め、例えば地元選出の国会議員に機会あるごとに要望するなど具体的な行動が一層必要になってくるものと思われます。

今すぐ実現しなくても、将来の教育界の充実発展のために努力を惜しまないことが望まれます。

教育の原点を求めて

栃木県中学校長会副会長
河内町立田原中学校長
石　川　　薫

このところ相手が教員とみると新教育課程の編成の事に話題をもっていってしまう。「来年度１年の英語は週何時間にしますか」「クラブ活動の部活動による代替は」と。悪い習性と思いつつ。

この時必ず脳裏をかすめるのが高校入試の事である。しかし入試が中学校の教育課程の編成を左右するようになったら本末転倒と言うべきであろう。この事はだれしも認識しているところであるが、進学の問題が生徒の、両親の切なる願いであるとなると、これを全く無視することは現実をふまえない空論とのそしりを受ける事にもなる。そこに教育の理想と現実を如何に調和させるかの葛藤が生じてくる。

そんな悩みで疲れた頃清掃の時間となる。秋は落葉の季節、生徒と竹ぼうきで落葉を掃き集め、それに火をつけて落葉たきを始める。農村部は未だのどかである。煙を見て生徒達が集まってくる。たき火をかこんで一しきり話しに花が咲く。校長の最も楽しい時間である。

初冬の放課後「僕達のグループ、校長室で卒業アルバム用の写真を撮りたいのですがよろしいですか。」予期しない珍客に思わず頬が崩れる。写真屋さんが来るまでソファーにかけて、おしゃべり。仲間に入る。やがて写真を撮り終って彼らは満足そうに、快い挨拶を残して去って行った。どこの学校でも見られる、ごく自然な中学生の姿である。

この生徒と教師との温かい心のふれ合いは教育課程がどう変ろうとも、社会がどう忙しくなろうと無くしてはならない教育の原点であると思う。校長として生徒と教師の心のふれ合いの時間が少しでも多くとれるような教育課程を編成し、一人ひとりの教師が、一人ひとりの生徒に笑顔で接する事ができるような雰囲気の学校を経営したいと願い、日々これ努めている。

校長の職員室経営

栃木県中学校長会副会長
高根沢町立北高根沢中学校長
仲　山　正　雄

誰もが時代の流れを読みにくかった激動の幕末に、南州はその時局の中心に立ち、心骨惜しまずそれに立ち向い、迷わず、騒がず、ためらわずの精神をもって対処した。巨体にふさわしい茫洋として計り知れないスケールの大きさと、人を愛し人のために尽す至誠の人であった。

よく気の付く人は人柄も温かいと言われているが、極めて人間的魅力にあふれていた南州の遺訓冒頭の述懐に「己を愛することは、悪しきことの第一なり」とあり、自分のことより、まず相手の立場を大切にした人であったと言われている。

職員室経営の中で大事なことの一つに、教師の身上への思いやりがある。迷わず、騒がず、ためらわず、ひとりひとりの教師を導き育てることである。近年、ひとりひとりの子どもを生かす授業の展開ということをしきりに耳にする。当然のことであるが、その前提として、いや同時に、ひとりひとりの教師を生かす職員室経営ということについて振り返ってみる必要はないだろうか。

職員室経営は学校経営の縮図であり、ひとりひとりの教師を教育実践へ向けて奮起させる場でもある。

校長は、職員室経営の雑多の流れの中から、本質的で秩序のある流れを創りださなければならない。その流れは本流である。本流は支流を集め、川岸を洗いながら静かに広々と流れていくようなものでなければならない。本流を創りだし、豊かな流れとする使命がある。この豊かな流れの中で、未来志向性をもち、学び合い、そして自己変革力のある教師が育つものと信じている。

県中学校長会事務局室に、「いまやらねば、いつできる。わしがやらねば、だれがやる。」ということばが掲げてある。「率先垂範を旨とすべし」と私は受け止めている。

大河ドラマ「翔ぶが如く」は終ったが、南州の精神を懐に抱いて職員室経営に力を注いでいきたい。

第41回全日本中学校長会研究協議会石川大会に参加して

栃木県中学校長会事務局長
宇都宮市立陽東中学校長
原　　稔

去る10月25日㈭、26日㈮の両日、上記の大会が文化の香り高い金沢市において盛大に開催され、本県から25名の中学校長が参加した。

大会主題は「心豊かでたくましい日本人を育てる中学校教育」で、豊かさの中で損なわれつつある人間性の回復を目指すものであった。

全体協議会では人間としての生き方の追求に関すること、続く生徒指導の今日的課題では心と心のふれ合いや相手を理解する心、基本的生活習慣の育成に関することなどが話題となった。

文部省中学校課長辻村哲夫先生は、①生徒指導②新教育課程③情報化社会における教育の三つを課題として取り上げ、特に③について教育施設・設備の改善とコンピュータの導入について述べられ、聞く者一同大きな感銘を受けた。

記念講演では「石川の文化」と題し、金沢美術工芸大学長の桑田良夫先生が、数か月間深雪の下に埋もれる石川県の厳しい風土が手作りの技を生み、四季の風情と溶け合った独自の文化が創造されたことを紹介された。外様の雄藩である加賀百万石が幕府の目をそらすための色々の施策、新井白石をして「加賀は天下の書府」と感嘆せしめた10万冊に及ぶ前田家文庫などの話には目を開かれる思いがし、学問、芸術の面で西田幾太郎、泉鏡花、室生犀星を生んだこともうなずけた。

「仏を学ぶことは自分自身を学ぶことであり、自分自身を学ぶことは自分自身を忘れることであり、自分自身を忘れることは悟りを開くことである。」という先生の言葉が今も心に残っている。

石川大会の成功はひとえに辻　収実行委員長はじめ役員各位の一致協力の賜であり、衷心より敬意を表したい。それにしても金沢を去って2か月後の今、郷土芸能のあのあやしいまでの笛の響きが私の耳を離れないのは、私だけのたんなるノスタルジアのせいなのであろうか。

研究学校発表概要

―基礎・基本の徹底と個性を生かす教育課程の編成を目指して―

宇都宮市立一条中学校長
阿　部　　豊

本校は、平成元年・2年の2か年間にわたり、文部省及び宇都宮市教育委員会の指定を受け、教育課程の研究を推進してまいりました。

平成2年11月2日には、県内外から多数の先生方の参加をいただき、公開研究発表会を成功裡に実施できましたことに対し、この紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。

さて、学習指導要領は、いよいよ平成3年より移行に入ります。今回の本校の研究は、新教育課程への移行と、完全実施に備えて、学習指導要領の意図する理念を的確に捉えて、それを本校の教育におろしていくという実践的な研究に、そのねらいを絞りました。

周知の通り、教育課程審議会が示した学習指導要領改善のねらいは4つあります。それを受けて学習指導要領総則第1の1にはその理念を示しているわけですが、本校の研究主題は、その中の1つを捉えて「基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実をはかるにはどうすればよいか。」と設定しました。

研究を進めるに当たっては、先ず「本校の生徒像と個の生徒の実態を捉えること」と「研究主題の趣旨を的確に捉え全職員の共通理解を図ること」を研究の基盤に据えて、学校生活を「教科の枠を越えた共通的な内容」と「各教科等」の二面から見直して工夫・改善を図ってまいりました。

先ず、「教科の枠を越えた共通的な内容」については、次のような点から見直しました。

1．本校の教育目標を見直し、それを生徒の目指す生徒像に結びつけ学校生活に具体化していく。
2．学校生活の基盤となる生活習慣の形成を、生徒の自主性・自律性を育てるという視点から見直していく。
3．生徒の主体的・能動的な学習態度を育てるという視点に立って学習習慣の形成を図っていく。

これらの学校生活の基盤の見直しは、学校生活を生徒の主体的な活動の場を拡大し、それらの活動を通して生徒に自主性・自律性を育てながら、自我の健全な確立を図ることを絶えず配慮していかなければならないと考えております。

次に、「各教科等の指導の工夫・改善」の面については、

1．各教科で達成目標とする「基礎的・基本的な内容」は「基礎的知識・技能」に絞りそれを確実に習得させる。外的要因としての「おちこぼし」は教師の責任において防止する。更に、意欲・態度等の育成は達成目標とはしないが、それを身につけるための学習活動を意図的に位置づけ、生徒が学習目標や課題を自覚しながら自ら学び、その内容を分析・評価できるような能力を育てる。
2．「個性を生かす」ということは「基礎・基本」の習得の過程の中で「個人差を的確に捉え、個に応じた多様な指導方法を工夫する」こと。更に、青年前期の中学生段階では、集団の中で自己実現を図ったり、対人関係の中で自己を見つめながら自己形成を図ったりしていくので、中学生時代の自意識の発達に伴って芽生える個性の芽や個の可能性を最大限に尊重することを個性を生かす教育の大きな目標とする。

今回の研究の「基礎・基本」と「個性」という一見二律背反するような両者の関係は、それを的確に捉えた上で、その調和的な達成を図らなければ本研究の成果は期待できないので、教育課程もその調和的な編成を図ることが大切であります。そしてそこに、もう一つのねらいである「自己教育力の育成」の三者を密接に絡ませた教育課程を編成し、その実現を図っていくことによってのみ21世紀を生きる心身共に健全な国民の育成を目指すことが出来るものと確信しています。本校ではこれらの理念をもとに全教職員のアンケートを実施し、意識の高揚を図りながら現在教育課程の編成に取り掛かったところであります。いま、この研究は緒についたばかりであって、これからも継続していかなければならないと思います。

一人一人の生徒に夢と希望を育む学校経営
―体験を重視した特別活動を中核として―

今市市立今市中学校長
瀧　　壽

1．主題について

中学生の日々の生活状況を見ると、生涯を通して最も活力に富み、意欲に溢れた時期であるはずなのに、最近の中学生は気力が弱く、粘り強さ、自制心といった耐性が十分に育っていないのではないかという指摘がある。成長期にある中学生にとっての毎日が、一人一人に夢と希望を持たせ、はつらつと覇気に富んだ、いきいきとした学校生活を送る中で自己実現に努める、望ましい援助指導を基盤に置き、学校経営の幅広い見直しと改善に取り組むことにした。

このような現状を踏まえながら進路指導を考えた場合、目前の高校進学だけを目指すのではなく拓けゆく将来を見通しながら、自己を正しく理解させ、自分の可能性、発展性などを多面的に把握させていくことが先ず必要となる。それには、学校生活のすべての領域での活動で成就感や充実感の体験の積み重ねや、何事によらず粘り強く努力する心の譲成が肝要になってくる。また、これからの変化の激しい社会を生きぬく人間として、地域の様々な分野で活躍している人達に直接触れたり、職場見学・勤労体験などを通して、勤労観、職業観を養って多様な生き方があることに気付かせ、職業のすべてに夫々の価値を認めることも重要である。

一方、教師は望ましい進路指導観についての共通理解を深めていくことが大切な鍵となることを自覚し、教師自身の自己指導力の研鑽に努める必要がある。

2．研究の構想

進路指導を中心とした学校経営とはどうあるべきか。学校の全ての教育活動を通して行う進路指導はどうあるべきかの視点から共通理解をはかり集団の中の自浄作用を生かすために、己が個として、集団の一員として自己存在感の確立をはかる基盤づくりを学校経営とした。

また、この実践の母体ともいうべき学級づくりの活動の柱とした進路指導の推進は、教育課程の全域で行なわれるものであるが、本校の生徒の実態から、特別活動や三領域外（課外）等の活動が適切と考え、特別活動を中核に据え、生き方指導を実践の軸とした。

3．「生き方指導」の基本的な考え方

(1)　生き方指導の方法と原理

自らの生き方を選択するということは、価値の選択であると捉えている。従って、自らの生き方の自覚には、価値認知行動の能力を育成することが基本である。価値観の形成には、直面した多くの価値自覚を集積し、自分の心の内に何らかの構造化がはかられることによって、人間の自然的欲求と獲得した価値観との相互認知作用（葛藤）で自己制御能力を発揮できるような援助指導が重要なのである。

(2)　生き方の３つのねらい

「生き方指導」の意義やねらいについては、多様なとらえ方があるが、本校としては自己理解を基に、自己実現をめざし、「感動の共有」「目的の意識」「個性の発揮」の３つのねらいを設定して、指導の重点化をはかった。

ア．「感動の共有」――― 生徒一人一人に自己存在感をもたせ、集団の中で共に生き、協働の感動を味わせることで満足感・成就感の感動体験をもたせる。

イ．「目的の意識」――― 自分の判断で物事を決定して行動できる自己指導力を育てる場と、困難を克服するため自力で立ち向かう機会を多く設け、活動過程への援助の工夫をはかる。

ウ．「個性の発揮」――― 集団の中で他の成員と共に生き、協力してよりよい生活を築こうとする中で、自分の個性や能力適性等を知り、自己発揮できるような工夫をする。社会的自己実現が果たせるようにするためには、地域の人々との交流や職業人から学ぶ機会を意図的計画的に導入し、「人間としての生き方」を身につけていける学校づくりに今後とも努めたい。

交流教育公開研究発表回顧

小山市立桑中学校長
斎　藤　　英

「やってよかった。」

これは、昨年11月５日に本校で実施した「心身障害児理解推進校」としての、公開研究発表会終了直後、本校職員の口々から出た言葉である。

生徒もよくやった。変容・成長もした。職員も懸命に努力した。ＰＴＡも物心両面にわたってバックアップしてくれた。その上、地区内外を問わず、多くの先生方の参加を得て、交流活動・授業研究経過の発表も予定通りできたのだから……。

本校は平成元年度から２か年にわたり、文部省小山市教委より、「心身障害児理解推進校」の指定を受けて、「心身障害児との心のふれあいを通じて、豊かな人間性を育てるため指導 ――県立国分寺養護学校との交流を通して――」を研究主題に、研究を進めてきた。

それまで本校では、〝いきいき栃木っ子３あい運動〟の目指す、「学びあい、喜びあい、励ましあおう」の心を基底として、「21世紀をになう豊かな人間性と、たくましい生命力をもつ生徒の育成」を教育目標に掲げて指導に当ってきた。が、生徒の実態を思うとき、素直で明るく、労をいとわず行動するなど、長所も多い反面、本番に弱く自律性や思いやりに欠けていたり、現代の子供に共通する自己中心的な考え、行動が目に映り、その対応・検討を話題にしていた矢先きの時宜を得たこの指定に、学校あげて取り組むことになった。

幸い本校は、昭和58年４月に現在地に開校された県立国分寺養護学校と、創設以来、ＴＲＣや生徒会代表による交流活動を実施しており、直接交流についてのレールは、既に敷設され、交流実践は比較的容易であったり、在校生の半数近くが小学校時代の交流活動体験者であるなど、好条件下にあった。

反面、私たち職員の間には、「心身障害児」についての理解や認識に差があったり、「心身障害児とは」・「心身障害児理解とは」・「心身障害児理解推進とは」、さらには「交流教育とは」等の疑問が生じ、その究明に暗中模索の日々が続く。そこで、研究協力校の国分寺養護学校の訪問研修を手始めに、県内外、遠くは京都市内の先進校を含めた訪問研修や、斯道に造詣の深い先生方を講師に迎えて、校内研修を続けながら、研究推進の中心・主役を生徒に絞って11月５日に向け、研究を進める。

そして、２年間、いや実質的には１年半という短期間で、次の仮説立証のため努めた次第である。

1．道徳や学級活動の時間の指導において、心身障害児に対する理解と認識を深める意図的・計画的な指導を進めれば、他人を思いやり、励まし合い・共に伸びようとする心が培われ、心豊かな生徒が育つであろう。

2．学級活動・生徒会活動・学校行事・クラブ活動等を通して、国養校との交流活動を、より深まりのあるものにすれば、他人を思いやり・励まし合い・共に伸びようとする心が培われ、心豊かな生徒が育つであろう。

また、全職員が、①指導研究部、②交流実践部③調査広報部のいずれかに所属し、１年生は「交流の相手を知る」＝準備、２年生は「交流に参加する」＝実践、３年生は「社会生活に生かす」＝発展、という、道徳・学級活動と交流活動年間指導計画に基づき、研究・実践を続ける。

とにかく、この２か年という限られた期間の中で、心身障害児やその教育について、今なお根強く残っている誤解や偏見の解消や、他人を思いやり、共に伸びようとする心豊かな生徒の育成にどこまで迫ることができたか疑問もあるが、生徒の生活行動にやる気と自信が芽生えた。職員の間にも協働体制が確立した。思えば、途中苦労もあったがよいことずくめの研究であったと感謝し、本校にとって記念すべき平成２年11月５日を、「交流教育宣言の日」と決め、新たなスタートをしたのである。　※　生徒数　914名 学級数　25学級。

同和活動への取り組み

那須町立下江川中学校長
佐　藤　継　也

本校は南那須地区の西部にあり、塩谷地区に近い農村地帯にある。生徒は素直であり、おとなしい。

昨年度から２か年間、県教委から同和教育研究学校として指定を受け、「互いの人権を尊重し、自ら考え、実践する生徒を育成するにはどのようにしたらよいか」を主題として研究実践を進めてきた。

１．研究構想

研究主題に迫るため、目指す生徒像として、「指標」を設定し、教科・道徳・学級活動・江川活動（学校裁量の時間の活動）の各部会に「育てたい能力・態度」を明確に位置づけ、実践の段階では、「何を」「どこで」「どのように」すればよいかを明らかにした。

２．おもな実践例

(1)　教科（社会科）

教科の中でも社会科は直接的・間接的指導を含むため、「学習意欲を高めるための資料の収集と活用」や「指導法の工夫」を行った。その結果、生徒は単なる知的理解に終ることなく、資料を基に考えたり、発展して調査発表しあったりするようになった。

(2)　道徳

道徳の「育てたい能力・能度」と社会科の指導を考慮して資料を決め、共感的理解の場を指導過程に位置づけた。そうすることによって、生徒が「資料中の人物の悩みや怒りを自分の体験や考え方と重ね合わせて感じ」とりながら価値内容を学習する形をとった。

(3)　学級活動

新指導要領の内容１～３を検討し、２つの指導過程を作成した。

その中で、「育てたい能力・態度」に対応した配慮を要する生徒への援助指導を位置づけた。

位置づけをすることによって、教師や生徒からの援助指導の実践を着実なものにしようとした。

(4)　江川活動

今までの学校裁量の時間の活動を「育てたい能力・態度」から見直した。

生徒は映画会、人権ポスターや作文の作成、パネルデスカッション等の活動を自ら推進していく中で、同和教育にかかわる能力態度を身に付けるようにしている。

３．研究の成果

(1)　生徒の変容

ア．人権にかかわる同和問題については、教科書だけにとどまらず、精選された資料で補いつつ総合的に学習したため、理解が確かになった。

イ．日常の話題や言葉づかいの中で、人権にかかわることがらに対し、以前より配慮するようになり、注意しあうことができるようになった。

ウ．学級の人間関係が良くなり、諸活動がより円滑にできるようになった。

(2)　教師の変容

ア．同和問題についての認識を深め、同和教育に関する研修に積極的に取り組めるようになった。

イ．毎日の指導の中で、生徒理解に努め、生徒一人一人を大切にしようとする意識が強くなった。

(3)　保護者の変容

ア．家庭においても、健全な人権感覚を育てようとする姿勢が見られるようになった。

イ．講演会や映画会等に協力を惜しまなかった。

４．今後の課題

(1)　生徒の積極性・自主性等の育成については、まだ十分でなく、今後も指導方法の工夫を重ね、指導の場を増やして、継続的に指導していく必要がある。

(2)　生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、よりよい資料の収集に努めなければならない。

地区だより

平成２年度研修活動の概況

宇都宮地区

本年度の研修主題は、「心豊かでたくましい日本人を育成する中学校教育」である。これを踏まえ、市内中学校長21名は、４つのブロックに分かれ、各ブロックごとに次のような研修副主題を設定し、年間をとおして研修を進めている。

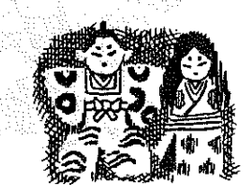
○一条ブロック（生徒の自主的・自立的な活動を促す学校経営の視点）
○陽北ブロック（豊かな心を育てる望ましい指導のあり方―体験を重んじた特別活動等）
○ 旭 ブロック（学校相互間の連携・協力のし方）
○陽西ブロック（新教育課程の移行と課題）

上記の研修のまとめ、及び発表会は、平成３年２月５日に開催する研修会において行われる。

この他の本年度の研修活動計画については、

○４月５日　本年度の組織づくりと研修計画の立案について
○６月19日　学校運営（多目的教室の活用等）
○７月10日　県立高等学校長との連絡・協議
○11月20日　文化財めぐり（茨城県石岡市、下妻市、八郷町）
○12月10日　県立高等学校長との連絡・協議
○平成３年２月５日　研修発表とまとめ、本年度の反省と次年度の計画について

以上年間をとおしての研修と６事業の研修を実施している。特に、上記研修活動の中で、例年実施している文化財めぐりは、本年第10回を迎え、今回は、市教委の文化課文化財保護係職員を講師に招き、茨城県石岡市の常陸風土記の丘（資料館、復原家屋）、下妻市の大宝八幡宮（さざれ石、本殿）、八郷町の西光院（立木観音、本堂）を見学し、古くから潤いのある文化を築いた遺跡をはじめ、数多くの文化的史跡や名所旧跡、民俗芸能、工芸等が伝承されている様子など、さまざまな歴史を体感した研修であった。（昨年は、埼玉県行田市、群馬県大田市の文化財について研修を実施）



新教育課程の研究と実践

上都賀地区

上都賀地区は、８市町村32校の校長で校長会を組織し、今日的な課題を研修主題に掲げ、年３回の定例研修会を通して継続的に研修を進めている。

今年度は、平成４年度本県で開催される関ブロ中学校長会研究協議大会に向けて、地区として新教育課程の研究とその実践について具体的な提案ができるよう準備段階に入ったところである。

現段階では、県中学校長会の示す方向や趣旨を充分に踏まえ、地区としての大きな教育上の課題である「生徒指導」の問題を取り上げ、課題解決の具体的方策を究明しよう考えている。今年度はとりあえず「生徒の自主的・自立的な活動を促す学校経営の在り方」を研修主題に取り上げ、各学校の実践例を中心に研修を進めている。

以上の活動に加え、本地区では次の学校が、今年度長期に亘る研究の成果を公開し、研究実践の交流を図った。

○今市中（県教委指定実験学校　学校経営⅚発表）
　一人一人の生徒に夢と希望を育む学校経営
　～体験を重視した特別活動を中核にして～
○北犬飼中（文部省指定　生徒指導　⅚発表）
　自ら考え、自主的に活動できる生徒の育成
　～学級での生徒の活動を中心として～
○北押原中（研修所指定　学習指導　⅚発表）
　個が生き意欲的に取り組む学習指導の展開
　～基礎的・基本的内容の定着を目指して～
○鹿沼東中（鹿教委指定　武道指導　⅚発表）
　相手を尊重し、互いに鍛え合う生徒を育てる武道指導

４校の教育実践は、新しい教育課程の編成や実施に当たっての先導的な役割を果たし、各学校のこれからの編成の在り方、内容及び方法等の方向を明らかにしてくれた。また、地区校長会の研修主題に直結する部分も多くあり、これからの本会の研修が質的にも一層高まっていくことと思われ、感謝しているところである。

新たに野木二中加わり充実した地区に

下都賀地区

本年度、野木中学校から分離した野木第二中学校が加わり、12校となった。下都賀教育事務所管内で、地区は栃木市、小山市に分断される形で、両市の南側に４町、野木町に野木中、野木二中、藤岡町に藤岡一中、藤岡二中、岩舟町に岩舟中、大平町に大平中と大平南中。そして、両市の北側に４町、都賀町に都賀中、壬生町に壬生中、南犬飼中、石橋町に石橋中、国分寺町に国分寺中がある。

本会は、前田英雄会長（岩舟中）を中心に、大きく二つの研修計画を立てている。

その一つは、毎月行う研修、二つ目は、研修テーマに基づいて行われる県外教育事情調査である。

研修テーマは、「21世紀を拓く日本人を育成する中学校教育を目指して」

基本方針として、栃木市並びに小山市中学校長会、郡市小学校長会及び県中学校長会と綿密な連絡をとりながら、下都賀郡中学校教育の充実振興を図る。

そのため、

1) 会員相互の研修を深め、共通理解のもと正しい考え方をもって、学校運営に当たれるよう意志の疎通を図る。
2) 各学校の主体性を尊重しつつ、情報交換を深めて、教育活動の正常化と活発化に寄与する。

特に、情報交換の中で「新教育課程と学校経営」については、平成５年度完全実施に向けて、各学校試行錯誤の中で、その実をあげる大変よい研修である。

二番目の県外教育事情調査は、本年度は文部省研究指定（昭63・平元年度）研究テーマ「自立的生活態度を育成する生徒指導」（自立体験を通して）の鹿児島県鹿児島市立甲南中学校（校長白石和徳）を10月中旬訪問研修し、効果を上げた。

新教育課程の実施に向って

小山地区

当地区（小山市中学校部会　11校）は、星井田享会長（小山二中）を中心に、昭和63年度から継続の「新教育課程への準備と学校経営」を研究主題として取り組み、３年目が経過しようとしている。今年度の研究内容として次の３点を掲げた。

(1) 新教育課程の編成をめざした中学校教育のあり方について
(2) 新教育課程の編成・実施上の課題
(3) 教育諸条件の整備

研究主題を設定し、度重なる研修を経て次のような研究成果をまとめ、過日発表会が行われた。

(1) については、激しい社会の変化に対応し、一人一人の生徒が主体的に生活し学習できるよう教育課程の編成に努めること。それには学校を生涯学習の基盤を培う場とし、さらに家庭や地域社会との役割分担の上で「開かれた学校」として地域の活性化に向って資するものと考えなければならない。また、「個の尊重」「個性の伸長」を重視し、選択教科の幅の拡大、授業時数の弾力的運用をはかることが必要である。

(2) については、平成５年度の完全実施に向け各教科及び領域の移行措置の年次計画を作成する。とくに平成３年度の教育課程の編成にあたっては学校の教育目標など教育課程の基本となる具体的事項を明確にし、生徒の生活、能力や地域の実態等を把握のうえ、全教師の理解と協力を得て教育課程を編成しなければならない。

(3) については、教師としての使命の再認識、資質向上のための研修への努力、加えて教職員定数の改善、施設設備の整備等、山積する教育諸条件の改善に前向きに取り組み、それを推進するため学校管理者として校長の責務の認識を一層深めなければならない。

研修活動の概要

栃木地区

栃木地区校長会の本年度の研修活動は、大きく分けて５つの内容から成り立っている。

その１は、小中学校長が同一テーマで年間を通じて研究を深めるもので、校長会研修活動の中核をなすものである。今年度は、「個性を生かす教育課程の編成と実践にかかわる基本的な考え方」をテーマとして研究に取り組んできた。その研究内容は、①「個性を生かす」ことについて、「個性」をどうとらえるか、「個性を生かす」をどうとらえるか、②学習指導要領の中の「個性を生かす」に関すること、③先年度調査結果の考慮について（特別活動の時数、選択教科について）等を柱としたものである。この研究は、11月19日に研究成果の発表を実施したところである。

その２は、テーマ別研修で、一つは「今年度の努力点とその施策」について全員が、二つは「地域（家庭）に働きかける学校」と「校長の孤独感の克服」のうち何れかを選んで、研究実践事例を発表し合い協議したものである。

その３は、講話を聞く修養活動で、今年度は３回実施してきた。５月に、鈴木功一学校教育課長の「基礎・基本の重視と個性を生かす教育」。８月には、中嶋仁市前市教育長の「東欧・ソ連の変革から考えること」。12月には、早川平市医師会理事長の「児童・生徒及び職員の健康管理について」である。

その４は、研修テーマにかかわる県外先進校の視察である。６月に、埼玉県杉戸町立広島中学校、11月には、和歌山県和歌山市立伏虎中学校を参観し、習熟度別学習や課題選択学習の導入の仕方、生徒の自主活動の促進などについてそれぞれ研修を深めてきた。

その５は、退職校長会との教育懇談会である。11月に栃木南中において、学校施設の地域開放について懇談し情報交換をおこなった。

中学校長会の特色と研修活動

那須地区

４月に、新会員を迎えて組織を編成して、間もなく１年を経過することになる。しかし、那須地区中学校長会は、３月末日で行事を終るわけではない。年度当初の歓送迎会は別として、８月に、本年度の退会会員の労をねぎらって終了となる。

他地区の中学校長会の研修や行事も、前年度のものを踏襲することを常とするのだろうが、当地区では、本年度をもって退会する先輩会員を、塩原温泉に招待して、懇親の中で様々な指導受けることを恒例としている。労をねぎらいながら、過去を語り、将来の教育を展望することは、本地区中学校長会の特色の一つである。

校長の在任期間が短くなってきた今日では、本地区のような特色ある会のあり方は、益々重要度を増すのではないだろうか。

さて、那須地区中学校長会の研修は、原則として市町村単位で数回の研修を積み、全体会で討議し、まとめたうえで小中校長会全体研修会で報告することになっている。本年度は、学校現場が実践課題としている道徳教育と、新教育課程の当面する問題について研修をすすめた。全体研修会は６時間という長時間に及んだが、建前論でなく、本音で討議できる雰囲気があるので、収穫は実に大きく、学校に持ち帰り実践できるところに意義がある。研修は、小中校長会全体会で報告して終り、その後これも恒例で特色の一つであろうが、塩原温泉か那須温泉に交互に宿泊し、懇談を深め、小中の交流をはかる。そして那須の郷土に根づく教育が熱っぽく語られるのである。（研修は出張となるが、宿泊研修は自己負担である）

今、校長の力量が問われているが、重要なことは、教師としての基盤である研修を校長自らが実践することは当然である。校長のリーダーシップだけが先行する嫌いはないだろうか。那須地区中学校長会は地道ではあるが、より実践と結びついた課題と取り組みながら発展しつつある。

文部省教員海外研修に参加して

栗山村立川俣中学校長　八木澤　利夫

ヨーロッパは私にとって幼い頃からの憧れの地でした。そんなヨーロッパをイタリア・ドイツ・フランス・スイスと、４か国も訪問できる海外研修の機会は、本当にありがたく、期待に胸ふくらませて参加した次第です。

16日間という短期間の研修ではありましたが見聞したことの余りも多かったことに、現在もまだ消化不良気味であります。とにかく『世界は広く、多種多様』であることを正に実感する機会となりました。

最初の訪問国はイタリアでした。生きた博物館の国とも言われる通り、古代ローマの遺跡が至る所に今なお現存し、生活の中に息づいているのです。特に、壮大なコロッセオを始め、ポンペイの遺跡、そしてバチカン市国の壮厳さに、ただただ圧倒される思いでした。なかでもシスティナ礼拝堂のミケランジェロの天井画に対面できた感激は生涯忘れられない思い出となることでしょう。

こうして、次々と目にふれる遺跡や芸術品の数々に感動し、興奮気味な私たちに、イタリアの人々は、「ボンジョルノ」と気軽に声をかけ、笑顔で歓迎をしてくれました。子どもたちも私達を見ると、好奇心旺盛な瞳を輝かせながら傍に寄って来て、サインをねだるなど、その仕種の実に可愛いこと、日本の子ども達と同様でした。

ドイツでは、大学の町ハイデルベルグの中世の街並や、ネッカー河沿いの古城の数々を観光することができました。往時の面影を水面に偲ばせて静かにただずんでいる古城の様は、誠にのどかで美しく、ロマン派の詩人ならずとも足を止めたくなるような景観でした。

学校訪問は、このイタリアとドイツの２か国でした。両国とも国情や教育制度は異っていても、人々の教育に対する考え方は同じで、教育への期待が真に大きく、その情熱の強烈なことを肌で感じ取ることができました。

イタリアでは、１９５０年代の再現ともいわれる経済の奇跡的な大発展の中で、新しい教育制度が模策され、教育水準の向上を目指して真剣に取り組んでいるとのことでした。各学校を訪問するに当たって、必ず市町村長が同席し、その土地で生産されるワインや食べ物等で盛大な歓迎を受け感謝感激の極みでした。

陽気なイタリアーノの学校は、自由な発想を重んじ、個々の子の個性を尊重し、伸び伸びとした授業風景を参観することができました。

ドイツでは、一人一人の子どもの個性や能力を最大限に伸ばすため、行政と現場が一体となり、教育の質的向上に努めているとのことでありました。特に、９歳にして能力検定があり、その後の進路が決定づけられる学校制度に、ドイツ人の厳しい教育観の一面を垣間見る思いでした。

授業参観において感じたことは、一人の子も無駄話をしたり、脇見をしたりすることもなく、先生の話に耳を傾け、学習に集中していることでした。

両国とも未来を子どもに托す思いは同じで、明日の国家の繁栄は教育の充実なくして成し得ないと語っておりました。日本でも新教育課程のもと教育の質的な改革が強く求められている時、この研修で得たものを少しでも現場に生かしていきたいものと思っております。

フランスとスイスは、行程の都合上宿泊した程度でしたが、パリの街並の見事さには驚きました。まさに芸術作品の中にいるような錯覚にとらわれその美しさに魅了されてしまいました。ベルサイユ宮殿やルーブル美術館の規模の大きさ豪華さは夢を見ているような気分になるほどでした。

こうして、研修の記事を書いている今も、ヨーロッパをこの足で、この眼で確めてきた興奮が鮮やかに脳裏に蘇ってまいります。

片言の英語を駆使しながら見聞した数々の体験は、今後の自分自身の成長の糧として大切にしていきたいものと思っております。終りに、この紙面をお借りして関係機関に心よりお礼申し上げます。